

慌ただしかった夏の終わりを迎えて

毎年せめて夏休みの期間だけでも、世間並みに少しはゆったりしたいものだと考えて、昨年初めて1ヶ月にわたる完全夏休みを実施したが、今年は1日の休みもなかった。3月末に若者自立塾が廃止され、その後継組織の、「基金訓練合宿型若者自立支援プログラム」の原案作成と、厚生労働省より事業委託を受けた「中央職業能力開発協会」からの事業認定を取るためだった。

6ヶ月間のプログラムは、8月9日の始業式から、来年2月3日の卒業式までの750時間に及ぶ膨大なもので、訓練内容も、すべて基準があり、座学、実習、職場研修・見学、職業人講話という具合に、すべてが、盛り込まなければならない。このほかにコミュニケーショントレーニングや54時間のワードとエクセルのパソコン講習も盛り込んだ。ようやくすべての必要書類をそろえ、受理されたのは6月4日だった。様々なチェックをクリアして、ついに認定が降りたのは、6月29日だった。4月半ばから着手して、1日たりとも気の抜ける日はなかった。そうしてついに未踏の難関を突破した。

しかし本当の闘いはここからだった。パソコンの授業は組み入れたが、まだ訓練生10名分のパソコンはなかった。どうしても、国からの補助金を受けられる定員10名でスタートする必要がある。受付締め切り前日に突然のキャンセル者が出た、1名が欠けても補助金はゼロになる。突然、北星高校の先生から、担任した卒業生が、進路のことで相談に来ているがとの連絡が入った。直ちにビバハウスに来てもらい、基金訓練の説明をし、入所が決定した。まさに薄氷を踏む思いだった。

8月9日の始業式に一方で備えながら、8月4日から釧路市内で開かれる教育科学研究会の全国大会で、「教育フォーラム」の「崩壊する地域から教育の希望を」テーマとする分科会で二人で発題をするために、3日の午後東京から車で来た早稲田大学の細金教授と出発した。（この発題が契機になって、尚男は10月30日旭川サポートステーション主催の「ひきこもり当事者と親の学習会」に講師として招かれることになった。）

5日の早朝特急で釧路を発ち、11時30分に新千歳航空駅で、高等学校生活指導研究会（高生研）大阪支部の先生方が企画した、6日からの札幌での全国大会の成功を目指すプレツアー「安達俊子さんに余市で会う」参加者24名の皆さんと合流した。余市からの観光バスに乗り、小樽では、「小林多喜二に出会う旅」も体験して頂いた。鶴亀温泉での夕食後、ビバのある余市教育福祉村内のセンターハウスで、懇談とその後は尽きることのない楽しい夜をすごした。